ぶんけい
教育 ほっとにゅーす
かわら版

教育の小径

No.216
2026 October
10月号



(一財)総合初等教育研究所参与
北 俊夫先生



今月のことば

九死に一生を得る

ほとんど助かるとは思えないほどの、まったく絶望的な状態から、辛うじて命が助かることをいいます。

遠足の教育的意義は何か

- 遠足は明治の後半に、近隣の学校が合同で実施した連合運動会に参加するため、会場とのあいだを歩いて往復したことがおこりだとされています。
- 遠足には多様な教育的意義や価値があります。行き先や子どもの発達段階を踏まえて目標を設定し、安全第一で実施します。

今月の記念日

10月6日
国際協力の日

昭和29年(1954年)のこの日に、日本が国際協力の援助国として国際組織へ加盟することを閣議決定したことにちなみ、外務省と国際協力事業団(JICA)が制定しました。

遠足の始まりは何か

「遠足」とは、見学や運動などを目的に授業として行う、日帰り程度の校外学習のことです。ちなみに、宿泊を伴うものは修学旅行といい、遠足と区別されます。いずれも学校行事です。

わが国で遠足が始まったのは明治の後半とされています。当時いくつかの小学校が合同で運動会を開催する催しがありました。いまのようにバスや電車はありませんから、会場とされた運動場まで集団で歩いて行きました。これを遠足と呼んだそうです。

その後、自然の観察や郷土学習を重視する考え方や児童中心主義の教育論の影響を受けて、学校単独で遠足を実施するようになりました。

遠足とは、先生方の引率のもとに、子どもたちの距離感からみてやや遠方の目的地まで歩いて行ったことをいったようです。外国には、日本の遠足に当たる行事はないといいます。

学習指導要領には遠足が「遠足・集団宿泊的行事」に位置づいています。各学校では、学年ごとや複数学年で、あるいは全校での遠足が毎年計画されています。春と秋に2回実施している学校もありますが、近年、授業時数の確保や経費の削減などから、実施の精選を行っている学校もあります。

遠足はさまざまにある学校行事のなかでも中心をなすものです。日ごろできないことを見聞したり体験したりできるからでしょう。子どもたちは、てるてる坊主を軒下に吊すなど、天候を気にしながら心待ちにしています。

遠足の多様な教育的意義

学校が実施する遠足は教育活動の一環であり、そこには次のような教育的な意義や価値があります。ややもするとマンネリ化しがちな遠足です。なぜ遠足を実施するのかを、教師が確認することはもとより、子どもたちや保護者にも伝えるようにします。

まず、平素とは異なる生活環境のなかに身を置くことにより、学校生活に変化と潤いをもたらし、充実感を味わわせることができます。また、校外で社会的な見聞を広げたり自然や文化に直接触れたりすることにより、それらに関心と親しみをもたせることができることにも意義があります。

遠足の当日は、基本的に集団で行動しますから、規律ある行動や生活の仕方、公衆道徳などを実践的に学ぶ機会になります。併せて、教室では十分にできない教師や子ども同士の触れ合いをとおして人間関係や相互理解を深めることができます。

遠足では、教科の学習で学んだ知識や技能、見方・考え方などを実地に観察・体験することができます。授業で学んだ知識と現実を相互に結びつけ、より確かな学びが展開されます。さらに、心身の健康や忍耐力の維持・向上などもあげることができます。遠足にはさまざまな教育的価値があります。

実施に当たっての留意点

遠足は教育活動ですから、実施の目的と目標を明確にします。その際、行き先や子どもの発達段階を考慮することはいうまでもありません。目標は教師間で共有することにとどまらず、子どもたちにもしっかり理解させます。

実施に当たっては、事前の準備や実地踏査を念入りに行います。トイレや昼食の場所を確認し、けがの防止など安全第一を基本に据えます。事故に遭遇したときの対応策も想定しておきます。楽しい行事にすることは重要ですが、単なるレクリエーションや物見遊山にならないようにします。弁当の食べ物やおやつの交換は禁止します。

遠足の実施後には、子どもたちに作文や絵画などで体験や思い出を表現させるとよいでしょう。教師も振り返りを重視し、次回の実施につなげます。

観を考えるシリーズ

学習評価をどう捉えるか

ここでは「学習評価観」について考えます。これまで学習評価といえば、単元末や学期末などに試験（主にペーパーテスト）を実施して、通知表や指導要録を記載することと受けとめられてきました。こうした営みは「評定」（成績評価）といわれるものです。評定し成績をつけることは学校の役割として重要な意味をもちますが、学習評価の主要な目的はほかにあります。

学習評価は本来指導と一体に行われるものです。すなわち、評価の結果をその場で、あるいはその後の指導の改善に生かすことです。学習評価は教師の指導改善のために行うものという評価観です。評価力は授業力だといわれる所以がここにあります。評価と評定を明確に区別することが重要です。

評価結果を授業の場で生かす際に、子どものつまずきをなくし、学力をつけるという視点と、子どものよさや可能性を見いだし、さらに伸ばすという視点の両者を重視します。前者は子どもの学力保障、後者には子どもの成長保障という意味があります。

子ども自身が評価結果を自らの学習改善に生かすことも重要です。子どもに成績（通知表など）を伝達する時期はこれまで学期末や年度末でした。学習が終わってから、こうだったと伝えられても、子どもの側からすれば「もっと早く知らせてもらえれば何とかできた」という気持ちになります。子どもや保護者への評価結果の伝達時期や方法を改善する必要があります。

このように、評価結果を教師は日々の授業改善に、子どもは自ら学習改善に生かすことが重要です。評価観が変わると、授業が変わります。

教育時事 教育の動向

ＩＣＴの使用状況調査

（一財）総合初等教育研究所は、授業でのタブレット端末の使用状況及び学校のデジタル化に対する教員の意識や推進上の課題を把握することを目的に「小学校におけるＩＣＴの活用状況に関す調査」を実施しました。

校長と教員を対象にそれぞれ質問事項を作成し、インターネットで調査を依頼しました。調査の実施期間は令和７年５月から７月でした。６６人の校長と４２８人の教員から回答を得ることができました。

教員には教科等の授業でのタブレット端末やデジタル教科書・教材の使用状況、学校教育のデジタル化のメリット・デメリットなどについて尋ねました。一方、校長には学校のデジタル環境の状況、校務におけるデジタル化やペーパーレス化の進捗状況、デジタル教材の使用状況について調査しました。

教員対象の調査結果から、タブレット端末を効果的に使用した指導方法を研究開発することや、使用効果を検証することなどが課題として明らかになりました。一方、校長対象の調査結果からは、ＩＣＴ環境の持続的な整備体制づくりやＩＣＴ教育のための校内の推進体制の確立、デジタル教科書を含む教材のデジタル化に伴う教員の研修などが課題として浮き彫りになりました。

本調査の結果と考察は「報告書」としてとりまとめられています。詳細は「総合初等教育研究所」「ＩＣＴ」で検索すると、みることができます。

連載 教育界への独りごと vol.12

「全国学力調査」の学力とは

文部科学省は毎年「全国学力調査」を実施しています。これまで調査の結果を見て「Ａ県は学力が高い」などと、地域による学力の高さがたびたび話題になってきました。

「全国学力調査」の問題は、最低限指導するとされる学習指導要領の内容を踏まえて作成されています。こうした問題の「正答・不正答」から、学力の「高い・低い」が判断できるのでしょうか。ここでいうよい成績とは正答率（通過率）の高さであり、言い換えれば誤答の少なさのことです。

学力が高いといわれる県は、つまずいている子どもが少ないということです。学力の高さを調査しているものではないからです。調査結果が悪い子どもへの再指導に生かされているのは、すべての子どもに最低限の学力をつけるためです。問題のできた子どもにさらに学力をつける取り組みはほとんど行われていません。学力は一人一人の子どもにつくものですから、学力の高さを評価するには問題を根本的に改める必要があります。正答率から学力の高さを判断することはできません。

運動能力の調査が行われ、子どもの体力の高さが話題になります。子どもたちは種目ごとに能力を最大限発揮しますから、子どもの最大能力を把握することができます。一方「学力調査」では子どものもっている最大の学力を調査していません。運動能力調査とは調査の趣旨や方法が異なります。

「学力調査」の結果から、子どもの学力の「高い・低い」を話題にしがちですが、正確には調査問題に対して、つまずいている子どもが「多い・少ない」というべきでしょう。（た）

INFORMATION 2026年度 ぶんけいテスト・ドリル採用 無料特典

児童の成長を学習・生活の両面から伝えられる新しい帳票 まなびレポート

業界初 児童のがんばりをスタンプで表現



ひと目でわかりやすく、文章を考えなくてもOK!

× 先生用AI

先生用AIで生成

いつも元気いっぱいで、進んで挙手し、意見を述べる姿が印象的でした。

スタンプを選ぶだけでAIが所見文例を自動生成！

「教育の小径」のすべてのバックナンバーを文溪堂ホームページからお読みいただけます。

お知り合いの先生にもお勧めください。

ぶんけい 教育の小径 検索

編集後記

高学年の時、「学校から隣の市の山まで徒歩で行き、登山・下山し、徒歩で学校に帰る」という遠足がありました。学校から山までは徒歩で２時間、登山は急な岩場や木の根が露出した箇所のある「最短ではあるがいちばん険しいコース」を登り、下山後また２時間歩いて学校へ…という、ハードなものでした。先生方も大変だっただろうなと思います。（M記）

ぶんけい きみの手に、みらいの夢を。

企画・編集：ぶんけい教育研究所
発　　行：株式会社文溪堂
発 行 日：2026年10月1日

◎定期送付の学校や先生方へ　送付先・部数等に変更のある場合は、右記にご連絡ください。　株式会社文溪堂 営業部 営業企画課　FAX.058-398-2821　Eメール bunkeido@bunkei.co.jp

◎「ぶんけい教育の小径」で検索すると、「教育の小径」のすべてのバックナンバーがご覧いただけます。